



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山我哲雄『一神教の起源』（筑摩書房、二〇一三年）：論評への応答
Author(s)	山我, 哲雄
Citation	基督教學, 50, 65-68
Issue Date	2015-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62364
Type	journal article
File Information	06_yamaga.pdf



一神教)が五つの革命をへて確立していった、という。紀元前一二〇〇年頃に始まる古代イスラエル共同体の成立から紀元前六世紀のバビロン捕囚までのおよそ六〇〇年間は、いわば拝一神教の時代であり四つの革命が繰り返される。それから半世紀をまたず第五の革命——そこには以前の革命とは質的に全く異なるパラダイムシフトがあると強調される——つまり唯一神教の確立にいたる。第一から第四までの革命と第五の革命との間に決定的相違を認識しながら一貫して革命という概念で括ることがはたしてできるだろうか。また唯一神教を連続する発展の頂点に据えることができるだろうか。

さて筆者は本書を出来るだけ忠実に紹介してみたつもりであるが、咀嚼に手間取り、十分消化しきれなかった。読み違いもあったかもしれない。本書には一般書とは言え、聖書学者としての本領が随所に刻印され、諸説や編集過程を緻密に展開するところは難解と爽快さが同居する。しかし難渋と思える議論や言説についてはしばしば個別具体的・一般的な出来事を傍証とすることで納得できるよう工夫が凝らされている。付随して、聖書の

言葉の解釈が分かれる問題、例えば「神の言葉における『我々』」には丁寧で慎重な解説が施されているところはある。有難い。

最後に筆者は著者が新たな知見を踏まえた古代イスラエル史を上梓されることを切望する。

論評への応答

山 我 哲 雄

拙著をシンポジウムの主題に取り上げてくださった北海道基督教学会、ならびに丁寧を紹介、論評して下さった桑原、堀の両氏に心から感謝する。本書の「あとがき」にも記し、桑原氏も紹介してくださったように、本書は、一神教に関してさまざまな分野の研究者が集まり討論する学際的なシンポジウムで旧約研究の代表者として発題した、「旧約聖書の宗教はいかなる意味で一神教的であっ

たのか」という論考がもとになっている。そこで論じた、古代イスラエルではもともと、他の神の存在を前提としながらヤハウェ以外の神々の崇拜を禁じる拝一神教的信仰が支配的であったが、それが国家滅亡と捕囚という過酷な政治的・社会的・信仰的危機に直面し、それを乗り越える形で——第二イザヤを中心に——他の神々の存在を原理的に否定する唯一神教に変質したという見方は、著者の独創などではさらさならなく、旧約研究ではずいぶん前からさまざまな研究者によって主張されてきたものである。ただし、旧約研究の専門外では、やはり旧約としていえば最初から一神教というイメージが強い。そこで、旧約学内部ではほぼ定説になっている考え方を外部に対して啓発する意味もこめてこのような発題をしたわけであるが、これが筑摩書房の編集者の目に留まり、一般読者向きの書物として出版できたわけである。これにより、より広い読者層に向けて旧約学的認識を発信することができたことは、著者として嬉しい限りである。

他方で最近の欧米の旧約学者の一部には、従来の定説を覆すことに熱心なあまり、古代イスラエルの宗教は古

い段階では周囲の諸民族とほとんど変わらない多神教だったのであり、預言者たちの時代（前八世紀以降）や捕囚時代（前六世紀）になって初めて一神教化したという過激な説を唱える人々が現れているが、これは著者にはやはり極論であるように思われた。そこで、ヤハウェ系の人名の検討などを手掛かりに、一方ではヤハウェのみを民族神、国家神とする拝一神教的傾向自体はイスラエルの初期まで遡るが、他方でそれが狭義の唯一神教化するのは捕囚時代であることを強調し、ただし結果的にそのような「革命」をいわば準備するかのような役割を果たす、より小さないくつかの信仰革命がそれに先行したことを指摘しようとするのが本書の趣旨である。

論評してくださった両氏は、この「革命」という言葉の使い方に主として問題を感じられたようである。桑原氏は、「第一から第四までの革命と第五の革命の間に決定的な相違を認識しながら一貫して革命という概念で括ることができだろうか」と批判される。著者が「革命」という言葉を用いたのは、一神教に向かう宗教史の発展に漸進的かつ必然的なある種の法則性を見る宗教進化論

的な見方に対抗して、多神教から一神教への移行に個人の宗教的天才のひらめきによる不連続的なある種の飛躍や突破を見る、イタリアの宗教学者ベッツォーニの理論と用語法の影響によるものである。ことによると、若い頃はまったトロツキーの永続革命論などの残滓が無意識的に影響してもいるのかもしれない。

著者の言わんとするところは、第二イザヤにおける「大きな革命」以前に、他の神々の放棄とヤハウェのみの崇拜、(エリヤ等による) バアル信仰との戦い、文書預言者たちによる普遍的な神観の提示、ヨシヤ王による政治的な信仰統一(申命記運動)といったより「小さな革命」が繰り返され、それらが結果的に最後の決定的な革命を準備する役割を果たしたということである。最初の四つの「革命」はあくまで拝一神教の枠組の中でその拝一教の性格を部分的に変えるものであったが、第五の革命はその拝一神教の枠組み自体を打ち破り、唯一神教的神観を確立するものであった。この意味で、最後の飛躍はそれ以前のものとは質的に異なるものであったと考えている。ただし、それが可能になったのは、あくまでそれ以

前の一連のより小さな革命があればこそ、なのである。

堀氏はより厳しく、「革命」という言葉を用いること自体が学問的に価値中立的でないと指摘する。たしかに、通常「革命」の語は、「革命前」の状態と比べてより良き、より優れたものが生じたという、「革命」を肯定的に評価する価値観を伴う意味で用いられることが多い(ロシア革命や中国の文化大革命に対する現在の評価は微妙であろう)。その意味で、この語の使用には唯一神教的神観を肯定するキリスト教的神観が「著者自身の拠って立つ」基盤として暗黙の前提になっているのではないか、という批判である。この批評には、甘んじて受けざるを得ないものがある。同じ批判は、ベッツォーニ自身にも当てはまるであろう。あくまで客観的に学問を営んでいるつもりでも、研究者自身が持つ宗教的神観が無意識的に考え方に影響を与えるということは、ある程度不可避であるのかもしれない。著者としては、前述の意味での歴史的に不連続、非法則的な、思想的な飛躍、突破の面を強調しようとしてこの語を用いたということでご理解願うしかない。

第二イザヤ以降の展開が十分語られていないという堀氏の指摘も、甘んじて受ける。第二イザヤまでの記述で三六〇頁と、この「選書」シリーズのサイズをすでに超えてしまったので、後は簡単な素描で済まざるを得なかった。要約すれば、唯一神観の「発見」ないし「発明」にはコロンブスの卵のようなところがあり、一度達成されればその後は信仰の大前提として自明的なものになったという面が大きい。ただし、それにもかかわらず、その後のユダヤ教の一部では、天使論や、神と悪魔的勢力の戦いを思想の中心とする默示的な二元論が發展し、唯一神教的神観の純粋性が失われていく傾向も見られた。この意味で、第二イザヤ的な唯一神観はやはり孤高を保っているとも言える。

第二イザヤ的な普遍的な唯一神観が、その後のユダヤ教を「普遍的な世界宗教」へと変容させる可能性はなかったのかという問いに対してであるが、本書中でも指摘したように、すでに第二イザヤにその部分的な意向が見られ、第三イザヤやイザヤ書への加筆者たち、ヨブ記やヨナ記の著者などによってそれが一定程度より發展さ

せられるという動きは端緒的に見られた。しかしその後のユダヤ教の主流は、エズラやネヘミヤを中心に排他的、律法主義的な方向に進んだので、ユダヤ教はあくまで異邦人による律法の受け入れとユダヤ教への改宗を通じた「閉鎖的な世界宗教」とどまった。この普遍主義的端緒を継承、發展させたのはむしろキリスト教、イスラム教である。なお、堀氏が挙げる恋愛関係での「君しかない」の譬えは、本書では十戒の第一戒に関連して、申命記的な拝一神教の説明で用いられている（二八九―九〇頁）。

両氏がその論評を通じて、この問題をさらに考えていくうえでよい示唆と刺激を与えてくださったことを、軽はずみな用語の使用の反省をも込めて、改めて感謝したい。